

直腸がん局所再発したが今後どうなっていくか、 抗がん剤はどうするか

4

相談者は初発の時に趣味に没頭して抗がん剤治療を真面目に受けなかったという経緯がある。今回、局所再発したが、抗がん剤治療を受けるべきかどうか迷っているという。

1 相談内容 60代男性 直腸がん患者

主治医よりピアサポートを勧められ、夫婦で来院された。

このご夫婦とは、一年前にもお話をさせていただいた。抗がん剤治療中に主治医の注意に耳を傾けず、趣味に没頭して真面目に治療を受けなかったため、ついに主治医から「もうあなたと治療についての話をするのは、これが最後にしたい。抗がん剤治療をしますか？ 止めますか？ 止めてもいいですよ」と言われ、見離されたと感じてサポートを求めに来られたという経過がある。

その時は相談者は反省し、抗がん剤を11回受けて終了した。しかし、その後、局所再発し、定位放射線治療ノバリスを18回実施したが効果はなく、逆に増大した。現在は痛みがあり、薬の量も増えたが、食欲もあるのでテニスにも出かけている。

抗がん剤も放射線治療も効果がなく、痛みのコントロールだけで今後どうなっていくのか。抗がん剤治療を受けるべきかどうかは自分でもどうしたらよいかわからない。妻は効果があるならば受けた方がよいが、前回は副作用を見てきているのでどうしたものかという思いもある。体力もあるので、このまま好きなことをして過ごした方がよいかもしれないと思ったりと迷っている。

2 相談内容のポイント

- 1 抗がん剤も定位放射線治療ノバリスでも効果がなかった。
- 2 今の痛みのコントロールだけで今後どうなっていくのか、抗がん剤治療をどうするのか自分でもわからない。
- 3 妻も前回の副作用を見てきたので悩ましく、このまま好きなことをして過ごした方がよいかもしれないと迷っている。

3 ピアサポーターの対応のポイント

- 本人、家族としての揺れ動く心の葛藤を共感しつつ、じっくりとお話を伺った。
- 前回の抗がん剤治療も頑張ったからこそ、スポーツを含めてほぼ以前と同じ生活ができ、今日につながっていると思うと伝えた。
- 今後の治療は、最終的には本人自身に決定していただくしかないものの、本人と家族の不安な思いなどを主治医に率直に伝えながら考えられてはどうかと話した。
- ご自分でできることをアドバイスした
 - 1) 体力維持のため、食事は腸の負担を考えて消化のよい物をよく噛んでゆっくりと食べる。
 - 2) 痛みも今は上手くコントロールできているので、テニスは絶対に無理をせず、仲間の交流の時間の方を大切に。その楽しい気持ちが免疫アップにつながるといいですね。
- 相談支援センターを紹介
主治医との相談だけで解決できない場合は、どんなことでも相談支援センターにご相談下さい。

4

ピアサポートの結果

最後にピアサポーターから「人はそれぞれ“生きようとする力”を奥深く秘めているように日々の相談の中でも実感しています。そんな力を信じて前を向いて過ごしませんか」と伝えると、「そうですね、それが大事ですね」と返された。

そして、「話を聞いていただいて本当によかったです。胸につかえていたものが落ち、気が楽になりました。また来たいと思いますのでよろしくお願ひします」と言われ、笑顔で帰られた。

5

対応したピアサポーターの所感

主治医が、相談支援センターではなく、ピアサポートを相談者に紹介してくれたことに感謝したい。こうした方には、がんの体験者であるピアサポーターとじっくり話されたほうが、自分たちで今後どのようにするのか考えやすいと判断されたのだろう。

進行したがんと向き合う中で、ある時期「抗がん剤治療を今後どうするか」と考えることは必要である。一人より二人、二人より三人ということもある。共に考えるお手伝いを、今後も続けたいと思えたケースであった。

考察

この事例から学ぶこと

相談者本人が一番大切にしたいものを一緒に考え、自分で意思決定を行えるようにサポートする。

【意志決定支援のために必要な情報やポイント】

- 1年前に真面目に抗がん剤治療を受けなかった理由はなんだろうか？
- 治療目的を理解して治療をうけていたか？
- 抗がん剤治療の副作用による苦痛はどんなものだったか。副作用を軽減する対処方法はなかったか？
- 過去に受けた抗がん剤治療はどんなものだったか？
- 今後、治療の選択肢はどのようなものを提示されているか？
- 本人が一番大切にしたいものはなんだろうか？

【講評】

相談者が、頑張って治療を受けてきたことをまず労い、相談者の気持ちに寄り添っていることが、その後の相談者の気持ちの表出につながったと思います。

抗がん剤治療を真面目に受けなかったことには何らかの理由があるのでしょうか、よく話し合うことで解決できることもあったかもしれません。副作用による苦痛が治療を受けることを妨げているならば、そのつらさを理解したうえで、適切な対処方法を考えることができるでしょう。ピアサポーターも含めた医療従事者のサポートが得られるよう、まずは情報共有できるとよいと考えます。

大腸がんの抗がん剤治療の選択肢は増えていきますし、副作用対策も進歩しています。好きなことだけをして過ごしたいのか、好きなことをするために少しでも元気でいたいのか。相談者本人が一番大切にしたいものを一緒に考え、悩みながらも自分で意思決定を行えるようなサポートが行えるとよいのではないのでしょうか。